

第3種郵便物認可

寿岳文章と新村出 深めた親交

新村さんの孫・恭さんが講演

ダンテの「神曲」の翻訳などを手がけた英文学者、寿岳文章さん（1900～92）にとって、「広辞苑」の編集で知られる言語学者の新村出さん（1876～1967）はどんな存在だったのか。出さんの孫で新村出記念財団（北区）嘱託の新村恭さん（71）が、長岡京市で「寿岳文章の生きた軌跡と新村出」と題して講演し、寿岳さんとお出さんの親交ぶりを紹介した。

講演する新村恭さん＝長岡京市の市中央生涯学習センター



寿岳文章さん



9月29日に開かれた講演会は、寿岳さん一家の業績を伝える活動に取り組むNPO法人向日庵（向日市）が主催。45人が参加した。

恭さんは岩波書店などで本づくりに携わってきたフリーの編集者で、「広辞苑」はなぜ生まれたか、新村出の生きた軌跡（世界思想社）の著書がある。恭さんは、寿岳さんと出

新村出さん



さんにはおびただしい数の往復書簡があり、2人はお互いの家を訪ねて談笑することも多く、出さんは寿岳さんの就職の世話もしていたと紹介。「新村出の付き合いの中でも、寿岳さんほど一緒に歓談した人は他にいないかもしれない」と話した。

寿岳さんと出さんには、江戸中期の真言宗の僧・慈雲への敬愛、和紙の研究、

イタリアの詩人ダンテの詩編「神曲」への関心など共通点が多いことも指摘した。「2人は好んだ和歌も同じだった。それは、西行法師のへ年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」だった」

恭さんは「寿岳さんにとって新村出は恩師であり、慈父、慈母のような存在だった。寿岳さんは新村出とともに一生をすごしたと言っても過言ではない」と強調。「両者に通底するのはヒューマニズムではないか。その学問は人への愛着と結びついていた」と説いた。

（大村治郎）

承諾書番号 18-4851

朝日新聞社に無断で転載することを禁止する